

発話に対する注釈表現

Comment Phrases to the Utterance

戸 澤 裕 子

Hiroko Tozawa

1. はじめに

発話には、話し手が伝達を意図する中心的な命題に対して、話し手自身の言及を言語化している部分が含まれることがある。この発話に対する言及をしている部分については、命題態度を明示したり、発話の力を調整するなど、それらが持つ機能について様々な分析がなされてきている。そのメカニズムを明らかにするため、本稿では、それらの表現の使用の社会的動機付け、すなわち、社会的・对人的側面にもたらす影響・効果という側面からではなく、これらの表現が、聞き手の発話解釈過程においていかなる役割を果たすかという点について、関連性理論の枠組みで考察する。

以下では、まず第2節で、自己の発話に対する注釈表現が、どのように分析されているかについて概観する。第3節では、このような表現が、聞き手の発話解釈においてどのような役割を果たすものであるのかを、関連性理論を用いて分析する。そして、関連性の第2原理（伝達の原理）の「最適な関連性の見込み」の計算に関わる様々な要因に関して言及し、話し手と聞き手の間の「最適な関連性」の予測レベルの差異に注目させるタイプの注釈が存在することを示す。さらに第4節では、

それらが聞き手の発話解釈のコストを下げたり、次なる発話の「最適な関連性」への期待値を下げることなく保持したりする機能を持つことを示す。

2. 発話に対する注釈表現の先行分析

以下の下線部のような表現は、その中心的な命題に対する話し手の態度を表したり、話し手が行おうとしている発話行為に言及したりしている部分であるといわれる。

- (1) a. As far as I know, ...
b. To my knowledge, ...
- (2) a. I don't know this for certain, but ...
b. John doesn't like your tie, I think.
- (3) a. Not quite on the subject, ...
b. By the way, ...
- (4) a. This probably isn't a good way to say this,
but ...
b. This may be a bit confused, but ...
- (5) a. If you don't know, John will never return.
b. Because I don't have a watch, what time is it now?
- (6) a. Unfortunately, ...
b. Sincerely, ...
- (7) a. Do me a favor, will you?
b. You made a mistake, didn't you?

これらは、何らかの緩和機能を持つ表現、何かを留保する表現、主たる伝達内容となる命題の伝達に対して話し手の責任を回避するような表現として扱われることも多い。

2. 1 調整機能を持つhedge表現

G.Lakoff (1972) は、hedgeという用語を、意味を曖昧にしたり曖昧さを軽減したりする機能を持つ、即ち、曖昧さを調節する機能を持つものとして用い、*sort of, kind of, loosely speaking, more or less, roughly, mostly, for the most part, can be looked upon*等を例として挙げた。しかしながら現在は、曖昧にする機能を持つ表現として用いられることもあれば、その逆の力を持つ表現を指すものとして用いられることもある。また、それが、表現自体を指すことも、その機能そのものを指すこともあり、さらにhedge機能を持つものとしては、上記の(1)~(7)のようなものに加えて、さらに、*well*などの間投詞や沈黙、表情等にいたるまで、非常に幅広い表現を含める場合もある。

実際、何らかの力を緩和する、または曖昧にする機能を持つ表現は、日本語英語を問わず、豊富に存在する。発話は、本質的に、話し手の意思により聞き手を無理やりコミュニケーション作業に参加させる力を持っており、そういう意味では攻撃的な性質を持つ。そのため、言語表現が聞き手に及ぼす何等かの力を緩和させる方向に働く表現が多く存在し、使用頻度も高くなっているように思われる。

しかし、たとえば、(7)の下線部は、「依頼」「断定」の発話の力を緩和する機能を持つ表現であるが、それらの表現が「賞賛」「謝罪」「約束」「謝意」などの発話の力を有する場合に用いられることは少ない。むしろ、それら後者のグループに対しては、発話の力を強める表現が加えられるほうが一般的である。

この点について、Spencer (2004) は、hedgeという用語を、発話の力を弱めるもの(downgraderまたはdowntoner)をあらわす場合に限定している。一方、hedgeに対応するものとして発話の力を強めるものに対しては、boostersという用語を用いて区分している(upgraderまたはintensifierとも呼んでいる)。そして、(8)(9)のように、前者、後者のグループともに、緩和と強化のどちらの効果も持ちうることを示している。

(8) a. 依頼, 不同意など+downgraders

→ 緊張を緩和する効果

b. 依頼, 不同意など+upgraders

→ 衝撃を強める効果

(9) a. 謝罪, 感謝, 賞賛など+downgraders

→ 肯定的効果を強める効果

b. 謝罪, 感謝, 賞賛など+upgraders

→ 肯定的効果を弱める効果

すなわち、Spencerに従えば、緩和機能を持つhedge表現は、より広い「発話の力の強さを調整する表現」のうちの一部であるということになる。

また、(1)~(4)の下線部は、いわゆるmaxim hedgeと呼ばれてきている表現であり、それぞれ、Griceの会話の格率(conversational maxim)に対応し、格率に対して遵守できない可能性について話し手がコメントをする部分であるとされてきた。しかし、こちらもまた、たとえば、「あまり確信は持てないのですが、…」に対して「これは確信を持って言えるのですが、」など、対になる表現が存在する。

2. 2 双方向の力を持つmaxim hedge

ここでは、さらに、(1)~(4)のようなmaxim hedgeとして知られているものについて詳しくみていく。これらは、Griceの会話の格率(Conversational Maxim)に対応しており、そ

それぞれの格率に対して責任を回避するものとされる。(Levinson (1983), Yule (1996))。

確かに、格率を遵守できないことに対する弁明をして、責任を回避しているような例の方は多く、実際に使用頻度がおそらく高いと思われるが、次の(10)のように格率を遵守していることをむしろ強調するような、逆の作用を及ぼす表現も存在する。

- (10) a. As far as I know, (私の知る限りでは、…)
 ⇔ As everyone knows, (周知のことですが、)
 b. To tell the truth, (本当のことを言うと、…)
 ⇔ To put it mildly, (はっきりとは言えないのですが、)
 c. Not quite on the subject, (話題が少しそれますが、…) ⇔ Pursuing this topic further, (もう少しこの話題を続けたいのですが、)
 d. To be short (手短かに言うと、…) ⇔ It's a long story, but ... 少し長くなってしましますが、

Brown & Levinson (1987) においては、hedgeは、述部や名詞句が表すそのものらしさの度合いを修正するような、小辞、語、慣用句として、緩和だけではなく強化も含めた双方向の力を持つものとして定義されている。その中で、maxim hedgeも、双方向の力を持つと分析され、それらの多くがポライトネス効果を持つことが論じられている。

また、中野 (2005) においては、maxim hedgeは事態を描写する言語表現に対するメタ言語的コメントであり、手続き的 (procedural) な機能を果たす表現であると分析されている。これら先行研究に従えば、maxim hedgeについても、格率を遵守できないことを述べる場合もあれば、むしろ遵守していることを強調するような場合もあることになり、「格率に対する話し手の遵守の度合いを伝える表現」の一部ということになる。

本稿では、これらの表現を、緩和のみならず、より広く何らかの調整機能を持つものとして捉え、緩和の意味の色濃く残るhedgeという用語を用いず、自己発話に対する注釈表現と呼ぶこととする。厳密にはこの注釈部分も発話内に含まれるものであり、一つの発話の中で、後続する (または先行する) 主たる発話内容に対しての注釈をしているメタ言語的表現なのであるが、以下では、簡潔に「発話に対する注釈」と呼ぶ。

次節以降では、これらの発話に対する注釈表現について、聞き手側の発話解釈過程のどの部分に資するものであるのか、また発話解釈過程に何らかの制約を課すものだとすればどんな制約を課すのかという点について、関連性理論の枠組みで、聞き手の観点から考察していくこととする。

3. 関連性理論を用いた発話に対する注釈の分析

3. 1 関連性の原理

関連性理論は、D.SperberとD.Wilsonによって提唱された、認知と伝達に関する理論であり、以下の2つの原理をその柱とする。

(1) 第1原理 (認知的原理)

人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。

(Human cognition tends to be geared to the maximisation of relevance.)

(2) 第2原理 (伝達的原理)

すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適な関連性の見込み (presumption of optimal relevance) を伝達する。

(Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.)

(Sperber & Wilson (1995: 260))

第1原理の方は、人間の認知活動全般に対して適用される原理であり、人間の認知が、関連性を指向していることを述べたものである。また、この関連性は、認知効果と処理労力との関数であると考えられているため、次のようになる。すなわち、他の条件が同じである場合には、認知効果が大きければ大きいほど関連性が高くなり、処理労力が小さければ小さいほど、関連性が高くなるということになる。

一方、第2原理の方は伝達の原理とも呼ばれ、発話を含む意図明示的伝達行為に関わる原理である。発話は、この意図明示的伝達行為の中の典型的なものである。なお、この第2原理の中の最適な関連性に関する部分については、「最大の関連性」ではなく、「最適な(optimal) 関連性」へと、Sperber&Wilson (以下、S&W) (1995) で理論修正が行われた部分である。この最適な関連性の見込みについては、以下のように定義されている。

(13) 最適な関連性の見込み (presumption of optimal relevance)

- a. 意図明示的刺激は、受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性を有する。

(The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.)

- b. 意図明示的刺激は、伝達者の能力と優先事項に合致する、最も関連性のあるものである。

(The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.)

(Sperber & Wilson, 1995: 270)

(13)の第2条項 b は、S&W (1983) では「使

えた刺激の中では最も関連性の高いもの」とされていたが、S&W (1995) で、「話し手が無精をしたり慎重になったりする権利、即ち話し手自身の優先事項 (preference) を考慮に入れた上での、関連性の最も高いもの」というように修正された。この点について、S&W はさらに「(伝達者の自分自身の労力を最小にしたいという願いと、自分自身の道徳、慎重さ、美意識からくる優先事項の双方を考慮に入れて) 伝達者にとって等しく容認できる一連の可能な刺激の中から、受け手の労力を最小にするような刺激を選ぶべきであり、また選んでいるようにみえるべきである」とも述べている。

この2つの原理について、以下の点に注目したい。第1原理は、人間の認知の傾向について述べたものである。したがって、インプットされた情報の処理は、この原理に基づいて、情報の受け手側で自動的に計算が行われるのであり、伝達者自身がこの点において何らかの作用を直接的に及ぼすことができるものではない。ところが、一方の第2原理は、第1原理とは異なり、「伝達者側が見積もった」見込みが自動的に受け手に伝わるということである。すなわち、この見込み計算に組み込まれた伝達者の様々な事情や思惑なども含め、受け手に伝わる可能性が出てくるということでもある。発話を含む意図明示的伝達においては、伝達者と受け手は決して対等の位置づけにあるのではなく、伝達手段の選択は、ひたすらに伝達者側にゆだねられており、受け手は選択された手がかりを頼りにする以外方法がないわけである。

すなわち、受け手にとっては、最適な関連性についての伝達者の見積もりがいかほどかということ、それ自体で十分関連性の高いことである可能性があり、そういう意味で非常に重要な部分である。一方、伝達者にとつ

ては、言語表現の選択に関わる自身の諸々の事情まで自動的に伝えてしまう可能性があるから、細心の注意を払わねばならない重要な部分である。

以下では自己発話に対する注釈と、関連性の原理、特に最適な関連性の見込みとの関わりを中心に考察していく。

3. 2 発話に対する注釈と発話解釈

発話に対する注釈は、以下の3点において発話解釈に寄与すると考えられる。

(I) 高次表意の形成を容易にする。

その注釈を明示的に伝達することにより、伝達の強さが強化される。発話に対する注釈表現と類似した機能を果たすものの中には、それが意図明示的に用いられた場合には、沈黙、時には表情といった非言語的な伝達手段までも含められる。しかし、(14a)のように、後続発話に対するコメントが、言語的に具現化されている場合には、(14b)のような、表情や態度など非言語的手段を用いて伝達された場合よりも、高次表意における上位節（14cの下線部）の形成が確実なものとなり、より強い伝達が可能となる。

- (14) a. Unfortunately, there is nothing to eat.
 b. (Sadly) There is nothing to eat.
 c. Mary regrets that there is nothing to eat.

(II) その注釈の概念的内容を、文脈想定として用いることにより、推意導出を容易にする。

すなわち、話し手が聞き手にとって、関連性があると予測している情報を取り出させるための、想起情報を提供する役割を持つ。推

意の導出を容易にすることにより、処理労力を軽減することになる。先に挙げた(5)の下線部は、この役割が大きいと思われる。

(III) 最適な関連性の伝達に関する話し手側の情報を得ることにより、聞き手側が予測した「最適な関連性」のレベルとの調整を行う。

発話に対する注釈表現のうち、maxim hedge と呼ばれてきているものが、最も強く関わりを持つと考えられるのが、上の(III)にあげたような調整機能ではないかと考えられる。以下では、(III)の働きを仮定した上で、それらに関わる注釈表現が、どのように発話解釈過程において役割を果たすのか検討する。

ここで、最適な関連性に関する定義について、話し手の意図的な関わりという観点からもう一度見てみる。なお、ここでは、意図明示的刺激のうち発話のみに限定し、伝達者は話し手、受け手は聞き手とする。

(14) 最適な関連性の見込み (presumption of optimal relevance) (=13) 下線は筆者)

- a. 意図明示的刺激は、(a)受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性を有する。

(The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.)

- b. 意図明示的刺激は、(b)伝達者の能力と優先事項に合致する、最も関連性のあるものである。

(The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.)

(S&W (1995: 270))

ここで伝達される最適な関連性の見込みには、上で述べたとおり、話し手が行う計算や、意図的な操作が関わる。その話し手の関わり方は、以下の4種ありうると考えられる。以下、(A)~(D)は、その関わり方とそれに対する注釈表現の例を示したものである。

3.3 最適な関連性の見込みの定義の第1項に関する注釈

第1項 a の下線部 (a) : 「受け手がそれを処理する労力に見合うだけの関連性」への、話し手の関わりについてみてみよう。話し手は、「聞き手にとってどれだけの認知効果を持つか」ということと、それが「聞き手がかける処理労力とつりあうか」ということを見積もって計算をした結果、関連性を見込みを割り出す。したがって、この部分には、話し手の見積もりが、以下の(A)(B)の2通りに関わる。

(A) 聞き手にとって十分な認知効果を有するかどうかについての見積もり (聞き手の認知環境や、話し手自身の命題に対する確信度が認知効果を左右する。)

<聞き手の認知環境に関する見積もりを伝達する注釈例>

I may have already told you this, but ... (前にお話したことかもしれませんが、...)
As you know, ... (ご存知のとおり、...)
As you may have realized, ... (もうお気づきかもしれませんが、...) 聞き飽きたことかもしれませんが、...初めて耳にすることかもしれませんが、...

<話し手の発話が表す命題内容に対する確信

度に関する見積もりを伝達する注釈例>

I don't have strong evidence for this, but...
 (確たる証拠があるわけではないのですが、...) *I'm not sure, but...* (確信はないのですが、...) *..., although I'm not sure about that. I don't know this for certain, but ...* *..., I wonder. ..., I think.*
 確実に言えるのは、... 確信を持って言えるのですが、...

(B) 聞き手の処理労力に関する見積もり

<聞き手の言語処理能力および処理労力に関する見積もりを伝達する注釈例>

Believe it or not, ... (信じがたいかもしれませんが、...) *It may sound paradoxical, but ...* (逆説的に聞こえるかもしれませんが、...) わかりにくい話かもしれませんが、... あなたならすぐわかると思いますが、... 想像力を働かせながらお聞きいただきたいのですが、...

3.4 最適な関連性の定義の見込みの第2項に対する注釈

次に、第2項 b : 「話し手の能力と優先事項」に対する話し手の関わりについてみてみよう。

(C) 話し手の能力に関する見積もり

<能力の欠如が原因で、関連性が十分ではないことを伝達する注釈例>

This probably isn't a good way to say this, but ... (適切な表現ではないかもしれませんが、)

This isn't the best way of putting it, but...
 （この表現が一番よいのかどうかわかりませんが、）何と云っていいのかわからないのですが、… よい言葉が思いつかないのですが、…

＜話し手の能力を駆使して、言語表現の適切さの度合いを上げた上での伝達であること（すなわち聞き手が予測する関連性のレベルに近づけたこと）を伝達する注釈例＞

わかりやすく言うと、…易しい言葉で言うならば、…¹⁾

Strictly speaking, ...（厳密に言えば、…）
 この言葉がまさにぴったりなのですが、…

ここでいう話し手の能力というのは、語彙力や文法力といった狭い意味での能力ではなく、先の聞き手の言語処理能力と同様のものであるはずである。内田（2013:17-20）は、コミュニケーションを行うことができるための能力として（15a-h）の8種類の能力を挙げている。

- (15) a. 字義的意味を記号解読できる能力
- b. 指示表現を復元できる能力
- c. 明示されていない言語情報を補うことが出来る能力
- d. 字義的意味から文脈に沿った話し手の意図的意味を推論する能力
- e. 発話から話し手の発話行為を同定することができる能力
- f. 発話から話し手の態度を推論することのできる能力
- g. 人が言ったことや考えていること、あるいは自分が思っていることを他の人に伝えることが出来る能力
- h. 自らが属するコミュニティに特有の言

語慣習、文化のなかで発話を解釈することのできる能力

「関連性」のレベルに影響を与える可能性のあるものとしては、これらの能力すべてが含まれると考えられる。また、さらにこれらはその個人が通常有している潜在的な能力ではなく、その発話時点で有している能力ということである。すなわち、たとえば、何らかの理由で理性を失っていて一時的に能力を十分に発揮し得ない状態になっていたとしたら、その一時的な能力についての言及をしていることになる。

(D) 話し手の優先事項に関する見積もり

＜時間の制約等、何らかの話し手側の事情により、最大の関連性を持たせることができない可能性があることを明示的に述べている注釈例＞

In short, ...（手短かに言うと、…）

Roughly, ... Roughly speaking, ...（大雑把に言うと、…）

In a nutshell, ...（一言で言うと、…）

Loosely speaking, ... 少し長くなるかもしれませんが、… 話が複雑になるかもしれませんが、…

If I may put the matter as simply as possible, ...（出来る限り簡潔に言わせてもらおうと、…）

Not quite on the subject, ...（話題が変わりますが、…話題変わって、…）

If I may change the subject, ...（話題を変えてよろしければ、…²⁾）

＜聞き手の予測するレベルの関連性を持たせるために、話し手の普段の優先順位を入れ替

えていることを明示的に述べている注釈例>

Frankly, ... Frankly speaking, ... (率直に言うならば, ...) *Honestly, ... Honestly speaking...* (正直に言えば, 正直に言うてしまうならば, ...) *Truthfully, ...* (本当のことを言うと, ... 実は, ...)

I can't tell you any more than that, ... I can't tell you as much as I would like to, but... (これ以上は言えないのですが, ...) ここまで言っているのかどうかわからないのですが, ここまで言うことが許されるのなら, *I can't tell you as much as I would like to, but...*

こんなことは普段は言わないのですが, ... ここだけの話にしておいていただきたいのですが, ...

4. 考察：最適な関連性の見込みに関連する注釈として分析することのメリット

一つは、上記のような分析をすれば、話し手は、会話の格率のような、人の会話全般を司る原理の遵守の度合いに関して注釈をつけているのではなく、一つ一つの発話が生じる状況に応じて、関連性の見込みに関して聞き手の予測との間の差異に関して注釈をつけているということになる。そうすると、同じ聞き手であっても発話場面に依って予測レベルが変わり、話し手側も発話状況に応じて達成可能な関連性のレベルが変わるといって、刻々と変動する条件を考慮に入れた上で、柔軟に注釈がつけられていることになり、この種の表現が、定型的で使用頻度の高い表現が存在するばかりでなく、非常に多様性が大きく生産的であることも当然のことといえよう。

もう一つは、これらの注釈表現が、聞き手の発話処理に貢献する働きを持つことが説明できるという点である。

では、どのように発話解釈の負担を軽減し

うるのであろうか。発話解釈の手順をみてみよう³⁾。

- (16) 処理コストが最小になるような道をたどりながら、認知効果を計算する。
 - a. 解釈（指示対象付与や一義化、コンテキストの選択など）を、接近可能な順序で吟味し、
 - b. 予測された関連性のレベルまで達したら（または達しなかったら）解釈を打ち切る。

この手順に従うと、聞き手は、解釈仮説を立てて検証するという作業を、予測された関連性のレベルに達するまで繰り返し、達したときに作業を打ち切るが、どうしても達成し得ないと聞き手が判断した場合にも打ち切るということになる。この打ち切り時を左右するのは、話し手が意図した「最適な関連性」に到達するか否かではなく、聞き手が予測した「最適な関連性」が達成されるか否かである。また、その打ち切り時は、早ければ早いほど、処理にかかるコストは小さい。

つまり、解釈の打ち切り時を左右することになるという点において、「聞き手が予測しているであろう関連性のレベル」と、「話し手の見積もる発話の関連性とのレベル」の差には、注意を促すだけの価値が十分あるわけである。たとえば、聞き手は、「処理のためのコストが（聞き手の）予想を超えて大きい」ことを警告するような情報を受け取ることによって、途中で計算を断念しないように促される。逆に、「認知効果が予想より小さい」「処理コストが小さい」という情報を受け取った場合には、打ち切りを早め、余分な解釈行程に進まずに済む。

後者の「余分な解釈行程に進むこと」を阻

止する場合には、明らかに処理コストを軽減し、聞き手の負担を減らすことにつながる。しかし、前者の方は、途中で計算をやめないように促されるため、コストは軽減せず、むしろ負担は増える。また、両者の見積もりが「合致するように話し手が努めたことを告げる」ケースも、特に直接的に処理コスト軽減に役立つわけではない。

しかしながら、聞き手は関連性を常に求める人間であり、インプットされたものを何度でも黙々と処理する機械ではない。自分の予測と話し手の予測がかけ離れ続けたり、予測した関連性のレベルに達し得ず解釈を断念する事態が続いたりすれば、コミュニケーション作業への参加自体を拒否してしまう可能性がある。予測レベルの差異に関して、話し手がこまめに注釈表現を送り、そのことへの強い関心を言語化することは、次の発話の解釈拒否、ひいてはコミュニケーション参加拒否をされることに対する、まさに予防策（ヘッジ）となりうるのかもしれない。

5. まとめ

以上、関連性理論を用いて発話に対する注釈表現についてとらえ直し、特に、maxim hedge と呼ばれ、Griceの会話の格率の遵守の度合いについてのコメントとして扱われているものを、聞き手の発話解釈の側面から分析した。その結果、これらは、関連性の第2原理の最適な関連性の伝達に関して、話し手が、聞き手が予測している「最適な関連性のレベル」と、話し手が提供する予定の「最適な関連性のレベル」との間の差異（上回ること、下回ること、合致させようと努めたこと）について、情報を提供するものであることを見た。

また、そのようにとらえると、個々の発話の発話時点において、話し手が自分の状況、

聞き手の状況を把握しながら、柔軟に最適な関連性を見積もった結果、様々な種類の注釈表現を発しうることが説明しやすいこと、さらに、聞き手にとっては、発話解釈の負担が軽減されるばかりでなく、次なる発話の「最適な関連性」への期待を持続させる効果を持つものであることを明らかにした。

注

1. 内田（2011:222）は、日本語においては、「言う」をコード化することが多く、遂行節を明示的に表現する傾向があるため、英語に比べ、このタイプの表現のバリエーションが非常に豊かであることを指摘している。
2. 聞き手にとっては、同じ話題のまま更なる認知効果の高い発話が続けば、コストは低く、関連性も高まるわけである。しかし、話し手側の何らかの事情により、よりコストが高くなるであろう別の話題へと移行するとなれば、聞き手の予測できないような、話し手の優先事項の突然の変更に関して、注釈をつけたものと考えられる。
3. Wilson & Wharton（2009:80）による。

参考文献

- Brown, Penelope and Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell, Oxford. [内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子（訳）『思考と発話—明示的伝達の語用論』研究社, 東京, 2008]
- Grice, P. (1975) "Logic and Conversation," *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, eds. by Peter Cole and Jerry Morgan, 41-58, Academic Press, New York.
- Levinson, S. C. Levinson, S. C. (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, MIT Press, Cambridge, MA.

- 中野弘三 (1998) 「副詞節の機能分析」『名古屋大学文学部研究論集 (文学)』45-58,
 _____ (2005) 「ほかし言葉 (hedge) の機能」
JELS 22, 131-140.
- 西山佑治 (2010) 「言語学から見た哲学」. 遊佐典昭
 (編) 『言語と哲学・心理学』, 9-38, 朝倉書店, 東京.
- Quirk, R. et. al. (1985) *A Comprehensive Grammar of
 the English Language*, Longman, London.
- Spencer-Ohtey, Helen (2000) *Culturally Speaking:
 Meaning Rapport through Talk across Cultures*, The
 Continuum Publishing Company.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986/1995) *Relevance:
 Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
 [内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳)
 『関連性理論—伝達と認知』 研究社, 東京, 1993,
 第2版 1999]
- Sperber, D. and D. Wilson (2012) *Meaning and
 Relevance*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 武内道子 (2012) 「表意, 推意, 手続きの記号化」『こ
 とばを見つめて—内田聖二教授退官記念論文集
 一』 英宝社, 東京. 49-63.
- 内田聖二 (2005) 「遂行分析から表意分析へ」*JELS*
 22, 221-230.
 _____ (2011) 「語用論の射程—語から談話・テ
 クストへ」 研究社, 東京.」
 _____ (2013) 『ことばを読む, ころろを読む』
 開拓社, 東京.
- Wilson, Deirdre, and Wharton, Tim (2009) 今井邦彦
 (編) 『最新語用論入門12章』 大修館書店. 東京.
- Yule, George (1996) *Pragmatics*, Oxford University
 Press, Oxford.